

## だいじょうぶかな...？ 小垣江東幼稚園（愛知県刈谷市）

### <事例1 飼育ケースのトゲトゲの幼虫を見つける（パンジーとツマグロヒョウモンの幼虫）>

「何かの幼虫かな？」

登園して飼育ケースを見つけた子どもたちは、「何かの幼虫かな？」「気持ち悪い！」「チクチクしたのがあるから、毛虫じゃないの？」と口々に話している。B児「ああ、これ私のうちにもいたよ！」A児「え～、うそ～」B児「ほんとだって。パンジーに付いてたよ」と言う。しばらく幼虫を見ていたら、C児「わっ、ウンチしたよ！」A児「えっ、どこ？本当だ！緑色！」B児「この葉っぱ食べたからじゃないの？いっぱい葉っぱが無くなってるもん」C児「うん、そうだよ！」B児「もっとこの葉っぱ取りに行こうよ」A児「うん、いいよ！」と戶外へ出て行く。パンジーを摘んでいると、B児「ほら、ここに同じのがあるよ」A児「本当だ」B児「これも一緒に仲間の所に入れようよ」A児「ええ！嫌だ。きもち悪いもん」B児「でも仲間がいたほうが嬉しいんじゃない？」A児「う～ん...」と嫌そうに首を傾げ、「じゃ、B児ちゃんが持って行ってよ」と言い保育室へ戻る。



「触っていい？」

「大丈夫かな？」と言いながら保育者が幼虫に触るのを見たり、図鑑で調べて「ツマグロヒョウモン」だと知り、幼虫のことが分かってきたA児は、自分から保育者に「先生触ってみて」と要求する。そして、保育者が掌に幼虫をのせるのを見て、「私も触っていい？痛くない？」と興味を示す。保育者に「大丈夫だよ。痛くないし噛まないし、全然平気。触ってみる？」と聞かれると、A児は「うん」と答える。保育者が「しっかり手を広げてね」と言い、そっと乗せるとA児は「わあ、本当！くすぐったい」と嬉しそうにする。

### <事例2 ツマグロヒョウモンの幼虫を飼育する>

「ダイヤモンドみたい」

幼虫がふたにくっ付いてさなぎになってきた。幼児はじっと見入って、「すごいきれいだね」「宝石みたい」「ダイヤモンドみたい」と思ったことを言っている。保育者「本当、ピカピカしてて綺麗だよ」B児「羽にもピカピカしたのが付いているのかね？」A児「早く蝶にならないかね。こんなに綺麗になって思わなかった」保育者「A児ちゃん初めはきもち悪いって言ったのにね～」と言うと、「だって～、本当にきもち悪かったもん」と笑っている。

「おうちがせまかったのかな？」

B児が家から持ってきた幼虫を飼育ケースに入れて飼っていた。それが3匹羽化した。そのうちの1匹は、羽が曲がっていた。B児「かわいそう、何で羽が曲がってるのかな？」保育者「本当だね、羽が曲がっててかわいそうだね」B児「入れ物が小さかったんじゃないの？」A児「でも他のは大丈夫なのに、これだけが曲がってるよ」などと言いながら、戶外へ逃がしに行くことになった。



ケースを開けるとすぐに飛び立って行くものもあったが、保育者が「こうやって指を出すと乗るんだよ」と指先に乗せる。それを幼児の指に橋渡しするように移して行く。幼児らは「すごいかわいいね」「チョウの足って細いんだね」とかわいがったり、じっと見たりしていた。そして飛び立つ様子を見て、「バイバ～イ」「元気でね！」と空を見上げて手を振っていた。

男児が「羽が折れたのは飛べるのかな？」と言い、C児が指に乗せるが飛ばない。保育者は「どうだろうね」と言い、それを幼児の指に橋渡しするように移して行く。保育者が「どうしようね。この蝶はどんな所に逃がすと喜ぶかね」と言うと、B児「パンジーが好きだからパンジーのところに置いてあげたら？」C児「そうだね」と言いそっと乗せる。保育者「ここならいいね、おなかすいたらいつでも食べられるしね」と言うと、見ていた幼児も「早く元気に飛べるといいね」と心配したり、「いい場所があって良かったね」と言ったりしていた。



### みどころ

事例1のチクチクとしたトゲのある毛虫のような幼虫に触る時の「だいじょうぶかな？」は、幼虫への興味はあっても、まだ自分のことを考えています。しかし事例2では、羽化したものの羽が曲がっているチョウを思いやり「だいじょうぶかな？飛べるかな？」と考えています。かわり方を探る「だいじょうぶ？」と思いやる「だいじょうぶ？」のどちらの思いも大切に、この言葉から成長が伝わります。この思いをもって考えたりかわり方を工夫したりすることで、科学する心が育まれています。